

Title	16世紀中葉の自然哲学書における「フアーブル」の役割
Sub Title	La fonction de la "fable" dans la philosophie naturelle au milieu du XVIème siècle
Author	小池, 美穂(Koike, Miho)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.16, (2011. ) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20111201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20111201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 16 世紀中葉の自然哲学書における「ファーブル」の役割

小池 美穂

### 1. はじめに

古代では、自然哲学と天文学は別個の分野として研究されていた。ルネサンスに入ると、自然哲学書として主に用いられたものはアリストテレスの *De Caelo* 『天空について』とプラトンの『ティマイオス』を折衷したものであった。ルネサンスよりも前の時代の天文学書としてプトレマイオスの『アルマゲスト』が重要な教科書として用いられるが、ルネサンスでは、あまりにも内容自体が難しいため、簡略化されたわかりやすい教科書が出版されるようになる。その代表的なものが、天球の研究にはヨハネス・サクロボスコ（13 世紀のイギリスの天文学者）の『天球論』、惑星の理論にはゲオルク・プールバッハ（15 世紀のオーストリアの天文学者）の『惑星の新理論』であった。この 2 冊の手引き書から、さらに様々なマニュアル本が生まれ、なかでもこれらの天文学書に自然哲学を導入する書物も現れた。ポンテュス・ド・ティヤールの『穿鑿好きの対話その一』がまさにそれである。しかし、マニュアル書の形をとるのでもなく、天球の書物でもなく、完全な惑星の理論書でもない。聖職者である「イエロムニウム」、哲学者の「穿鑿好き」そして詩人兼哲学者である「隠者」の 3 人の対話で構成され、プトレマイオスの注釈者たちから受け継いだ宇宙理論を展開し、星や惑星の動きを数値化し、そしてアリストテレス派の哲学的解釈をもって自然現象の原因について語っている。しかし、哲学的描写で大半が占められ、主に 4 大元素について述べているので、天文学書というより自然哲学書に近い。

「理論的」な宇宙分析のなかで、文学的描写がひととき目立つのが「ファーブル」の存在である。「ファーブル *fable*」とは、ラテン語の *fabula* 「物

語、説述」から由来し、「神話物語、寓話、小話、教訓譚」の意味を表す<sup>1</sup>。16世紀では、物語、作り話、演劇を指し<sup>2</sup>、特にギリシャ神話がフアーブルの代名詞として頻繁に用いられた。『穿鑿好きの対話その一』のなかで「フアーブル」は神話、驚異的な話そして迷信と、姿を変えて現れる。また、「フアーブル」のなかでは真実に基づく歴史上の出来事も一つの物語として登場する。

天文学と自然哲学の知識をもとにして書かれた『穿鑿好きの対話その一』に物語を導入することがふさわしかったのかどうかを吟味していくなかで、「フアーブル」が当時どのような役割を果たし、どのような位置を占めていたのかを分析する。「フアーブル」のなかで最も重要な位置を占める神話の役割とその限界を考え、また驚異的な話をどのように挿入しているのか、最後に歴史上の出来事が自然哲学書のなかでどのように扱われているのかを考察する。

## 2. 「フアーブル」としての神話の役割とその限界

神話と哲学は、ルネサンスにおいていうまでもなく重要な関係にある。ロンサールの『賛歌集』で用いられているように、ギリシャ神話は哲学詩のなかで必要不可欠な道具として現れる。象徴的に物事を語ることで、真実を「覆い隠す」ことができるからである。この真実を暴くための特権が神に選ばれた詩人だけに与えられる。天文学者・詩人であるジャン＝ピエール・ド・メームは、宇宙の構造を説明する概論『天文学的教育、天空の運行と動きの基本と初期の原因を含む<sup>3</sup>』の中で、詩人ウェルギリウスやヒ

---

<sup>1</sup> *Dictionnaire historique de la langue française* (direction Alain Rey), Paris, Dictionnaires Le Robert, 1998.

<sup>2</sup> Edmond Huguët, *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle (1863-1948)*, Paris, Didier, 1946.

<sup>3</sup> Jean Pierre de Mesmes, *Les Institutions Astronomiques, contenant les principaux fondemens et premières causes des cours et mouvemens celestes*, Paris, Michel de Vascosan, 1557.

ギヌスによるギリシャ神話の引用を取り入れ論証を行い、詩の象徴的な特質を生かし、天空の仕組みをわかりやすく説明している。モンテーニュの『エッセー』における古代・中世の道徳哲学の影響を語るピエール・ヴィレ<sup>4</sup>は、神話と寓話の書物は1550年代に頻繁に再版され、当時、大変「人気」のある形式であったことを述べている。

神話による「ファーブル」の役割を分かりやすく説明しているのがテレザ・シュヴロレ<sup>5</sup>の書物である。彼女は、様々な時代のなかで、詩的な部分あるいは物語がどのように扱われてきたのかを描いている。古代ギリシャにおいて、芸術と詩はプラトンのような哲学者に不信感を抱かれていた。プラトンは寓話の見せかけの性質を告発し、物語を通して真実を捉えることは出来ないと述べている。というのも、真実は日常生活の親しみのある言葉に属さないからである。

中世の哲学者は古代ギリシャやローマの哲学者よりも「ファーブル」に対して寛容に見える。聖アウグスティヌスは寓意的な形、そして「覆い隠された表現」に重要性を条件付きで与えている。彼は「詩人たちを、神話を用いるヴァロン派の仲間に入れ、この神話的神学は国家的神学と同様、道徳的に下劣であり、『不死の本質とは相反する』ため、哲学者が用いる自然的神学とは区別されている<sup>6</sup>」と述べている。詩については、トマス・アクィナスは聖アウグスティヌスと同様な立場をとっている。詩は彼にとって、最も低い学問 (*infima doctrina*) であるものの、非難されるべきものではない。「比喩的な言葉」を用いる聖書は、その言葉の理解を深めるため、詩と物語の知識を必要とする。「真実を覆い隠す<sup>7</sup>」物語と寓話は少なくとも

---

<sup>4</sup> Pierre Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Paris, Librairie Hachette, 1908, p. 19.

<sup>5</sup> Teresa Chevrolet, *L'idée de fable : théories de la fiction poétique à la Renaissance*, Genève, Droz, 2007.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 16.

<sup>7</sup> 詩的「ベール」は、読者の好奇心を引き付け、そして知りたい願望を引き起こす役割を持つ。イザベル・パンタンは、この「ベール」の役割をロンサール

ルネサンスまでそれぞれの立場の正当性を主張している。一般的に 16 世紀では、教育目的に用いる「良い物語」とただの娯楽に過ぎない「悪い物語」を区別している。

#### a. 教育目的

16 世紀は、古代のテキストが威光を放った時代であり、またアナロジーと象徴主義への関心が強かった。古代に倣い、象徴としての神話は以前より一層多くの書物のなかで用いられるようになる。当時の、神話の役割について述べている人気を博したスペイン出身のユダヤ人哲学者にして医師のレオーネ・エブレオ (1460-1535) がいる。彼は『愛の対話<sup>8</sup>』のなかで、神話の役割を主に 4 つに分けて語っている。まず最初に記憶を助け、長い会話を手短に、そして寓意的な表現に変える。2 番目が教育的役割で、神話のイメージを通して物事を教える。3 番目が知識の正確な伝達で、神話によって知識を歪曲することなく伝達する。そして 4 番目に神話はあらゆる精神（「精神性の低い」人は神話を字義通り読み、「精神性の高い」人は神話の道徳的な意味を考える）に適応できる可能性を持っている<sup>9</sup>。

神話のなかの物語は、『穿鑿好きの対話その一』のなかで頻繁には用いられていないが、哲学的・数学的側面に関わる部分で出現する。例えば、この書物の冒頭部分で、第 8 の天<sup>10</sup>の様々な動きに関して、詩人から見た解釈

---

の『秋』と『冬』の賛歌の描写のときに用いていることを『16 世紀後半のフランスにおける天空詩』（「ロンサールとユマニストの神話」）のなかで示している。

Cf. Isabelle Pantin, *La poésie du Ciel en France dans la seconde moitié du seizième siècle*, Genève, Droz, 1995, p. 276-280.

<sup>8</sup> ティヤール自身この書物を 1551 年イタリア語からフランス語に訳し、いうまでもないが、この作品はティヤールの書物に大きな影響を与えたのである。

<sup>9</sup> レオーネ・エブレオ、『愛の対話』（本田誠二訳）、平凡社、1993 年、p. 117-118.

（仏訳）Léon Hébreu, *Dialogues d'amour* (traduction de Pontus de Tyard), Lyon, Jean de Tournes, 1551 ; Léon Hébreu, *Dialogues d'Amour*, traduction de Pontus de Tyard, (texte établi par Tristan Dagron), Paris, Vrin, 2006, p. 165-166.

<sup>10</sup> プトレマイオスの天動説の世界は基本的に八つの層になった同心円の形をと

を「隠者」が示す。東から西へと動く第 10 の天はアトロポス、反対に西から東へと動く第九の天はクロート、第 8 の天の不規則な動きはラケシス。このように、天空の 3 つの動きと運命の三女神を重ね合わせて解釈している。天空の動きをパルカたちに例える考えは伝統的なもので、すでにプラトンの『国家』の第 10 巻で描かれ、プロクロス<sup>11</sup>によって長々と注釈されている。ボッカチオは『異教の神々の系譜』のなかでファビウス・クラウディウス・G.フルジャンスを通してこの考えを再び取り上げている<sup>12</sup>。ティヤールが用いたとされる原典は、ジャン・セアールによると、おそらくニコラ・クザーヌスの影響を受けたとされるコエリウス・ロディギヌス（イタリア語ではルドヴィコ・リッキエリ<sup>13</sup>）であるとされている。ティヤールと

---

り、四大元素の円の上に七つの惑星が存在し、その上に第八の天がある。

<sup>11</sup> A. J. フェステュジェールによるプロクロスの仏訳は以下のとおりである。  
« Maintenant, quant aux activités motrices des Parques, nous les entendons comme s'accordant avec l'ordonnance des activités cognitives. Car Clôthô meut de la main droite et évidemment la révolution vers la droite, Atropos de la gauche et il est donc clair que celle-ci meut la révolution vers la gauche, Lachésis meut de chacune des deux mains en tant que faisant tourner les deux sphères ». Proclus, *Commentaire sur la République tome III, Dissertations XV-XVII (Rép.X)*, traduction et notes par A.J.Festugière, Paris, J.Vrin, 1970, p. 209.

<sup>12</sup> Cf. Giovanni Boccaccio, *Genealogie Ioannis Boccattii: cum demonstrationibus in formis arborum designatis*, Venetiis, ductu & expensis Octauiani Scoti, per Bonetum, 1494, I, 5, 6.

<sup>13</sup> Cœlius Rhodiginus, *Lectionum antiquarum libri XXX*, Basileae, per H. Frobenium et N. Episcopium, 1542, I, 14. この箇所のジャン・セアールによる仏訳は以下のようである。「 Le premier, ils l'appellent Atropos, c'est-à-dire sans retour : car ils ont estimé que le ciel des fixes se mouvait d'un mouvement simple de l'orient à l'occident. Le second, Clotho, ou retour : car les planètes vont au rebours du ciel des fixes d'occident en orient. Et le troisième, Lachesis, c'est-à-dire sort, parce que le hasard est maître des choses terrestres ». Cf. Pontus de Tyard, *Œuvres complètes tome IV, 1, Le Premier Curieux*, édition de Jean Céard, Paris, Editions Classiques Garnier, 2010, note n° 56, p. 191-192.

ロディギヌスの運命の三女神の個々の役割は、確かに一致している。ティヤールの場合、三女神は惑星の上に存在する第八、第九、第十の天を表しているのに対し、ロディギヌスは第八の天、惑星そして地球の出来事に対応させているので、三女神は宇宙全体を示している。ティヤールの発想はおそらく、当時の関心事<sup>14</sup>に合わせた解釈である。ここでの神話の役割は哲学的知識を補完することであり、神話本来の役割をなす真実を包み隠すことではない。寓意的な表象は天空の動きを識別するための一種の暗記方法のような教育的役割にしか過ぎない。

#### b. 「科学」的説明を補う神話

上述のような教育的役割以外、神話は説明し難い自然の現象に具体性を与え、不足している情報を補う手段として用いられる。たとえば、雷の描写のなかの神話がこのような役割を果たしている。雷は空気中に起こる現象の一つであり、四大元素の「空気」のところで述べられている。この現象は「鞘を砕かず剣を割り<sup>15</sup>」、あるいは「がま口に害を与えず金を溶かす<sup>16</sup>」ことができるのである。これらの出来事は、「穿鑿好き」にとって説明し難いものとなっているものの、実体験によって確認ができる。そしてさらに「古代宗教の神秘的なもの」に会話が移行する。

彼ら[古代人]はマニユビ、すなわちユピテルの落雷を三段階で説明してい

---

<sup>14</sup> 当時、ローマ皇教グレゴリウス 13 世はカレンダーの改革にとりかかっていたところで、太陽年と恒星年の違いを定めるさいに必要な第八、第九、第十の天の複雑な動きを一刻も早く解明しなくてはならなかった。ティヤール自身、この改革に大変興味を持ち、1557 年にカレンダーについての理論書を出版している。Cf. Pontus de Tyard, *Discours du Temps, de l'an, et de ses parties*, Lyon, Jean de Tournes, 1556.

<sup>15</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours de la nature du monde, et de ses parties. A sçavoir; le Premier Curieux, traittant des choses materielles: et le second Curieux, des intellectuelles*, Paris, Mamert Patisson, 1578, f. 60 r°.

<sup>16</sup> *Ibid.*, f. 60 r°.

た。すなわち、彼らは、ユピテルが落雷を三段階に分けて加えていたと信じていた。彼らによると、一撃目で、大神は人間に警告を与える。狙いを定めた二撃目は、12の神々の合意による忠告や意見ではなく、人を利するものだが、損害なしというわけにはいかない。三撃目は報いで、神々の復讐の念を満足させるものだ。ユピテルによって、全ての高位の神々の同意を得て行われる<sup>17</sup>。

このように、雷は象徴的に神の天罰と警告であると信じられていた。おそらくこの箇所は、当時大変読まれていたセネカの『自然研究』のなかに出てくるユピテルの役割の影響が強いとされている。第2巻のところで空気中で起こる様々な現象の中の一つである雷、特に雷光にセネカは興味を持っている<sup>18</sup>。三段階によるユピテルの警告は、ティヤールと同様、雷の物理的な力と共に描写されているのである。しかし、セネカはこの雷の神話的解釈を信じがたいものとしている<sup>19</sup>。セネカはこの神話的解釈を一つの象徴と見なすよりも字義通り解釈してしまい、雷の象徴的な側面を完全に否定している。反対にティヤールは、雷の概念をよりよく理解できるよう

---

<sup>17</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, *op.cit.*, f. 60 r<sup>o</sup>-60 v<sup>o</sup>.

<sup>18</sup> 「エトルリアによれば、雷光はユピテル大神から送られたものであるという。そして彼らは、この神から三種の投げ矢が送られて来るとしている。彼らの言によれば、第一の投げ矢は警告を与える、しかも穏やかなもので、ユピテル大神ご自身の賢慮によって送られる。第二のそれもユピテル大神の送るものであるが、しかしこれはユピテル大神の賢慮が決議されたうえでなされる。[・・・] 第三の投げ矢も同じくユピテル大神が送るが、しかしこれは、エトルリア人が上位の神々と呼ぶ神々が賢慮の協議に招き入れられてのうえである」。セネカ『自然研究(全)―自然現象と道徳生活―』(茂手木元蔵訳)、東海大学出版会、1993年、第2巻、41章、p. 85.

<sup>19</sup> 「慧眼をもってすれば、君は一見して以上の古人の説の誤り方が分かるであろう。なぜならユピテル大神が雲の中から雷光を送って、神殿の円柱や、樹木や、時にはご自身の像までも襲う、などということを信ずるほど愚かなことがあるか。また、神殿泥棒や殺人犯や放火犯は罰を受けないのに、罪もない家畜を打ち殺すなどということも」。 *Ibid.*, p. 86.



に一つの道具として神話を用いている。自然哲学において、「穿鑿好き」は雷の現象を証明しがたいものであると説明し、神話を挿入している。しかし、それに諸手をあげて賛同している訳でもなく、「このような驚異的な出来事は、証明し難いため、古代宗教の神秘的な内奥の事柄として書き記された」としている<sup>20</sup>。

### c. 「科学」と「神話」の遊離

神話の役割が明らかになるとその限界<sup>21</sup>も見えてくるためか、ティヤールにおいても神話の有効性は失われつつある。「隠者」は、1552年の『隠者の対話その一』のなかで神話の支持者として現われるが、1557年の『宇宙論<sup>22</sup>』では、神話を補助的な役割に留めている。おそらく、このことは学問の形態が変化しつつあることを示しているのであろう。例えば、数学者ジャン・ペナ（1528-1558）は、ユークリッドの『オプティカ』の注釈書の序文のなかで、虹の現象について、タウマースの娘であるイーリスの神話的解釈を批判し、最も確かな光学的説明へと読者を導くのである<sup>23</sup>。『穿鑿好きの対

---

<sup>20</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, *op. cit.*, f. 60 r<sup>o</sup>.

<sup>21</sup> ハイディ・マレックは『穿鑿好きの対話その一』のなかで、「古代神話」の役割に統一性がないことを指摘している。作品は、「百科全書」的な性質をもち、世界は多様な視点から検討され、そこには「絶対的な見方」は存在しないのである。Cf. Heidi Marek, *Le mythe antique dans l'oeuvre de Pontus de Tyard*, Paris, Honoré Champion, 2006, p. 70.

<sup>22</sup> 1557年初版の書物の題名は『宇宙論』であるが、1578年の第二版の書物は二部に分けて新たに発行し、題名は『世界の本质とその部分に関する2つの論文、すなわち、物質的なものを扱う穿鑿好きの対話その一、ならびに知的なるものを扱う穿鑿好きの対話その二』。1587年の第三版は六冊の哲学的対話をまとめた『哲学論』。そのなかの一冊として『穿鑿好きの対話その一』が存在する。

<sup>23</sup> « Itaque Poëtae cum aliam tanti miraculi causam non invenirent, cum Opticen non caperent, Iridem Thaumantis filiam fecerunt, qui miraculorum Deus est creditus. Atqui Aristoteles cum incredibili sagacitate scientias omnes degustasset, & horum visorum causa e Physicis peti non posse cerneret, Taumanti ac poëticis sigmentis nuncium remittens, ad Opticas speculationes se convertit, ex quibus Coronam quidem refractione, soles vero geminos, reflectione, Iridem autem & refractione & reflectione radiorum ab

話その一』で、「穿鑿好き」は古代の詩人を批判している。彼は、詩人が話している彗星の出現に伴う前兆を信じることなく否定する。そのあとすぐ、「隠者」が付け加える。

詩人たちは虚偽の事柄で自らの書き物を称え、人間の思考に楽しみや感嘆を呼び覚ますことができると思っている全ての事柄で書き物を埋め尽くす。また、詩人という職業はあまりにもいいかげんなので詩の技法にのっとっていたら真実をあらわすにもウソの衣に包まれていないと表しきれないのだから。詩人を信用なんてできるのだろうか<sup>24</sup>。

詩人は、虚言で詩巻を飾り立て、真実を覆い隠す。「隠者」はここで、「穿鑿好き」と同様、神話を用いる詩人を批判する。この箇所は第2版（1578年）に付け加えられたもので、時間が経つにつれ、詩と神話に対するティヤールの態度が変化していくことがわかる。シルヴィアーヌ・ボクダムは、この箇所を「科学」と「詩」の相容れないところであると述べている<sup>25</sup>。

「隠者」は神話が知識の伝達手段として限られた形式であるから、信頼性に欠けるところがあると思っている。オヴィディウスによる太陽の動きの神話的解釈がそのケースである。太陽の特徴を説明している箇所でも、さらに詩人の解釈を付け加えている。

というのもオヴィディウスは、自分のやり方で、哲学そして自然科学などのまじめな事柄をあまりにも軽く語る。そのことで彼は他の箇所でも十分に非難されている。とはいえ、彼は[太陽の]動きを詩的に表したかったのであろう<sup>26</sup>。

---

oculo exilientium fieri monstravit », Jean Pena, *Euclidis Optica et Catoptrica* [...], Paris, A. Wechelus, 1557, f. bb iii r°.

<sup>24</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, op. cit., f. 50 v°-51 v° .

<sup>25</sup> Sylviane Bokdam, « La poésie astronomique de Pontus de Tyard », *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, Tome 48, 3, 1986, p. 668.

<sup>26</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, op. cit., f. 22 v°-23 r°.

「隠者」は、オヴィディウス（ファエトン）の寓話の意味を説明しようと試み、それを太陽の動きに適用している。しかし、詩的寓意はあまり哲学的主題を扱うにはふさわしくないと判断している。

このように、『穿鑿好きの対話その一』に出てくる神話は手短かに図式化され、記憶しやすいような形を取っている。さらに、説明しにくい事柄を哲学的に補い、象徴を用いて物事を語る。しかし、ティヤールのとった態度は詩に対して消極的であり、最終的には神話の限界を示すことになる。

自然界の出来事を描くためにティヤールが用いたのは、神話だけではない。自然界の説明し難い出来事を「驚異的な話」、そして迷信という形で示すのである。

### 3. 驚異的な話と迷信

#### a. 驚異的な話

驚異的な話とは、現実の世界でありえない物語を指している。例えば、「穿鑿好き」は、四大元素の「水」の驚異的な力を描写している。この元素は、様々なものを石に、また雌馬の乳の色を黒色に変化させ、川のなかに消された松明を入れることで灯することができる。さらに死んだ動物を生き返らせ、水を飲むことで、人間の口から本音を言わせることができる。いくつかの川では黒い雄羊を白に、白い雄羊を黒に変身させることさえできる<sup>27</sup>。これらの内容は信じがたいものであると「穿鑿好き」は述べているが、完全に否定している訳でもない。これらの逸話は「水」の元素理論を論証するためのもので、医学的効果や錬金術の効果と同様に扱われている。

雨の現象については、少し異なった口調で「穿鑿好き」は話し始める。

---

<sup>27</sup> これらの物語をティヤールは、大プリニウスの『博物誌』の2巻から取り入れている。川や水によってあらゆるものが石に変化し、消された松明が灯され、雌羊（ティヤールの場合雄羊）が黒になったり、白になったり、雌馬は黒い乳を出すという物語は『博物誌』のなかですでに存在する。詳細について以下を参照。大プリニウス『博物誌』（中野定雄[他]訳）、雄山閣、1986年、第2巻、106章、p. 129-130.

俗説は、(穿鑿好きは続けた)、奇妙で信じがたい事柄で一杯であるが、さらにありえない話としては雨の話がある。蛙、ミミズ、毛糸、肉、ミルク、血、小麦、石、そしてその他のものが降ってくるのが見えるという雨である。それらの現象を自然哲学者は、粘々する発散物を原因とし、その発散物が湿った液状の蒸気と共に上昇したとする<sup>28</sup>。

この奇妙な雨は伝統的な主題で、例えば、大プリニウスも『博物誌』のなかで同じ驚異的な現象を語っている。しかし、ティヤールは大プリニウスとは異なり、この現象の原因を特定しようとしている。そして、「粘々する発散物」によってこのような雨が降ると述べている。ジャン・セアールによると、ティヤールはルフェーヴル・デタープルとコクレユスのアリストテレスの『気象学』の注釈書に頼っている<sup>29</sup>。ここでコクレユスはティヤールと同様大プリニウスの哲学的説明に現象の原因を求めている。

これらの信じがたい「フェーブル」は、雨を視覚化し、具体化するのである。雨や水の現象はあまりにも明白な日常的な現象で、それらの効果を証明するのは難しい<sup>30</sup>。そこで物や動物が水あるいは雨を通してある状態から他の状態へと変化する例を挙げ、液体の力を示している。

---

<sup>28</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours, op. cit.*, f. 65 r<sup>o</sup>-65 v<sup>o</sup>.

<sup>29</sup> 「雨と共に、時には、蛙、ミミズ、小魚が降ってくる。というのも水蒸気と共に粘性の発散物が上昇するからである。その発散物が太陽の力によって、そのような動物に変化するのだ。彼らは自然に発生するものだから」。Aristote, *Meteorologia Aristotelis, Eleganti[...]*, Nuremberg, Friedrich Peypuss, 1512, f. XXVI r<sup>o</sup>. « Cum pluvia decidunt interdum ranunculæ, vermes et pisciculi : quia cum vapore aqueo simul elevatur materia viscosa, quæ per virtutem solis in talia animalia transmutari potest : quandoquidem spontaneam habent generationem ».

<sup>30</sup> 「水」の明白な事実についてイエロムニームによって指摘されている。「低い元素的な水はあまりにも明白な事柄で、証明する事態、無駄で無意味なものである」。Pontus de Tyard, *Deux Discours, op. cit.*, f. 61 v<sup>o</sup>.

## b. 迷信

驚異的な物語のなかでも「穿鑿好き」と「隠者」にとって強く批判されるものもある。例えば、沼地や泉の蒸気が月まで上昇し、月が全ての蒸気を吸収し、湿った性質になるという考えは受け入れにくい。「隠者」によると、最も受け入れ難い話は、彗星の出現と現世で起きている災禍を結びつけることである。

奇妙なことだが、(と私は「穿鑿好き」の話しを中断し)彗星は、風や雹[・・・]より怖くもなく無害であるにも関わらず、人間の間では、ひどく恐れられている。だから、[空に]現れるだけで、雷や雷鳴が民衆を怯えさせる以上に多くの王子を怖がらせるのである。本当に、全く自然に空気中で起きる発火が、王の死、戦争まで引き起こす感情の動揺、ペストあるいは飢饉による悲惨事をもたらすだなんて。これ以上ばかげた迷信を聞いたことがない。予見者がそれを人間の理性のなかに刻みこんだ。[...] あらゆる良心的な自然哲学者は、以下の意見に留まっている。[彗星の現象は]熱く、乾いた、粘性の、そして発火可能な発散物にしか過ぎない<sup>31</sup>。

彗星にまつわる迷信は第2版(1578年)で付け加えられたもので、「隠者」は自らの立場をはっきりとさせ、迷信の不合理性を告発する。おそらく、彼は16世紀の占星術者を批判しているのであろう。占星術者は、毎回彗星が空に現れるたびに、民衆の不安を引き起こすような事柄を選び、地上で起きる出来事を予言していた<sup>32</sup>。「隠者」は最も理性的な哲学者の見解に留まることを勧める。迷信にこだわるよりも、哲学の領域に留まるほうが得策であるという「隠者」の判断は、ティヤールの判断でもある。この1578年に付け加えられた彗星の話は、現実に1577年に現れた彗星と関連している。この彗星の出現によって、ヨーロッパ中の多くの占星術者が予知を試

---

<sup>31</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, *op. cit.*, f. 49 r<sup>o</sup>.

<sup>32</sup> この点については以下の書物を参照。Kathleen M. Hall, *Pontus de Tyard and his Discours Philosophiques*, Londres et Oxford, Oxford University Press, 1963, p. 110-111.

みた<sup>33</sup>。彗星は、王の死や政治的問題を意味していたので、この時期アンリー3世に仕えていたティヤールは、理性的な態度で対応し、王には都合の悪い迷信を信じないよう助言している。

経験や観察によって確認ができる挿話は誤ったものとなり、迷信的なものになる。確認不可能なものは驚異的な話の領域に留まり、否定されずに哲学的論証のなかに導入される。

#### 4. 歴史上の出来事

歴史上で起きた事柄は真実を基礎に置く点で、作り話とは正反対であり、一つの証言として引用することができる。四大元素の「水」に関する論述で、「穿鑿好き」は泉について説明するために、過去に起きた出来事を引き合いに出している。

ローマ人対マケドニアの王フィリップとの戦の間に起きた出来事である。その時、テラメヌとテラシアの2つの島の間に、突如海底から一つの島が出現し、その島から熱い泉が湧き出た<sup>34</sup>。

「ローマ人対マケドニアのフィリップ王との戦」の年代の推定が一つの証言から可能になる。テラメヌとテラシアの島の間に一つの島が誕生した現象も、歴史上で起きた出来事であるが、16世紀では一つのトポスになっている。すでにセネカは『自然研究』のなかで、島は地震の現象と同じように空気によって出現することを指摘している<sup>35</sup>。ポール・オルトラマー

---

<sup>33</sup> このことについて以下を参照。C.Doris Hellman, *The Comet of 1577: Its Place in the History of Astronomy*, New York, AMS Press, 1971.

<sup>34</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, *op. cit.*, f. 64 v°.

<sup>35</sup> 「また空気の精力は、陸地の大きな場所を粉碎することが出来るし、新しい山を下から上に高めたり、以前には見られなかった島を海の真ん中に置いたりすることも出来る。テラ島やテラシア島も、またわれわれの時代に、われわれの眼前において、多島海の中に生まれたあの島も、それらはみな空気の精力が日光の下にもたらしたものであることを疑う者があるだろうか」。セネカ、『自

ルの註釈<sup>36</sup>によると、テラーとテラシアの島の間に2つの島が出現した。紀元前197年ヒエラが、そして紀元46年ごろティアが現れたのである。大プリニウスもこれらの島に言及している<sup>37</sup>。自然哲学書を書いているティヤールであるが、実際のところ哲学者のみに頼っているのではなく、歴史家のジュスタンに影響を受けている。ジュスタン（3世紀ごろ）の書物「トログ・ポンペの『普遍的歴史』の概説書」で、ローマ人がマセドニアのフィリップ王（紀元前382-336年）と戦を繰り広げ、平和条約までたどり着くものの、条件が満たされないまま戦が続くという内容である。そのなかで休戦の際、島の出現を描いている<sup>38</sup>。休戦時に地震が起こり、2つの島の間から一つの新しい島が出現し、温泉が湧き出たという話であるが、ティヤールは殆ど一句一句ジュスタンの書物から引用している。しかし、細かく調べていくと、ティヤールは地震の現象そのものを省いている。「穿鑿好き」は海の真ん中に島が誕生したことに興味を持ち、それがどのような状況で誕生したのかは述べていない。

---

然研究』、前掲書、第6巻、21章、p. 250.

<sup>36</sup> Sénèque, *Questions Naturelles*, texte établi et traduit par Paul Oltramare, Paris, Les Belles Lettres, 2003, note n° 2, p. 276.

<sup>37</sup> 「有名な島でデロスとロドスは、歴史の記録によれば、ずっとむかし海から生まれたという。[・・・]キラデス諸島の中のテラとテラシアは第145オリンピック紀の第4年にそしてまた同じ群の中のヒエラ、これはアウトマテと同じものだが、その130年後に、そしてヒエラからニスタディアムのところにあるティアはさらに110年後のわれわれの時代、マルクス・ユニウス・シラヌスとルキウス・バルプスが執政職にあった年の7月8日に出現した」。大プリニウス、『博物誌』、前掲書、第2巻、89章、p. 123.

<sup>38</sup> 「同じ年[休戦の年]に、テラメヌとテラシアの島の間の大海で地震が起き、それによって突然新たな島が2つの島の間に出現し、温泉も湧き出た」。Justin, *Les Histoires universelles de Trogue Pompee, abbregees par Justin Historien*, Paris, Michel de Vascosan, 1559, f. 78 r°. おそらく、ティヤールはラテン語の1573年版も用いた可能性がある。というのも、この箇所は1578年の第2版に付け加えられたものであるからだ。詳細は以下の書物を参照。Justin, *Justini ex Trogi Pompeii historiis externis libri 44*, Lyon, Gryphe, 1573.

『穿鑿好きの対話その一』のなかのもう一つの箇所、今度は地震の現象について話をしている際、「穿鑿好き」は歴史的な出来事にぬかりなく言及している。

このようにしてシリアで、ティグラネスが平和な統治を行っていた際、いくつかの町が低いところから高いところまでひっくり返され、そこで17万人の死者が出た。ローマ人とマケドニアの王フィリップとの間に平和条約が考えられていた時代にも[このような出来事が起きた]。ロードス島そして多くの他の都市は恐ろしい揺れによって大変な奇禍に遭遇した<sup>39</sup>。

「安らか」と「低いところから高いところまでひっくり返され」の対照的な表現、そして死者の数が、地震の驚異的で破壊的な力を示している。歴史上の出来事に地震の現象を導入することは、ティヤールの独創性によるものではなく、これもまた伝統に従っている。先ほど述べたセネカの『自然研究』のなかでもエジプト、デロス島、パフォス、あるいはティールで起きた様々な地震が言及されている。大プリニウスは『博物誌』第2巻のなかで、ティベリウス・ユリウス・カエサル（紀元前42年—紀元後37年）の時代、12の都市が地震によって破壊されたことを記している。ここもまた『穿鑿好きの対話その一』の第2版（1578年）に付け加えられた箇所で、ジュスタンの影響によるものだと考えられている。ティヤールは先ほど述べた歴史家ジュスタンの書物「トログ・ポンペの『普遍的歴史』の概説書」のなかで、アルメニアの王国を支配していたティグラヌスの話を取り入れている<sup>40</sup>。ティグラヌスの王国が18年間、内部と外部の戦なしに平和のなかで暮らしてきたことを語っている<sup>41</sup>。ティグラヌス王国は戦がなか

---

<sup>39</sup> Pontus de Tyard, *Deux Discours*, *op. cit.*, f. 80 r<sup>o</sup>.

<sup>40</sup> 40章の題名は「どのようにアルメニア王ティグラネスがシリアの国民によって呼ばれ、王国を得たのか。その後、ローマ人に敗れ、大王国がポンペイウスによって地方に分散された」。Justin, *Les Histoires universelles de Trogue Pompee*, *op. cit.*, f. 96 r<sup>o</sup>.

<sup>41</sup> 「しかし、戦争から免れた国ではあったが、地震には脅かされた。あまりに



った反面、自然の災難に見舞われることになる。地震が発生し、死者17万人を出したのである。その後、この地震がきっかけでティグラヌス王国は徐々に衰退していく。ティヤールは、この歴史的出来事を違うニュアンスで書き直している。地震がティグラヌスの王国の衰退を予兆しているのに対し、『穿鑿好きの対話その一』では、地震が破壊力のある自然現象であることを述べ、象徴的な意味は一切省かれている。

## 5. 結論

『穿鑿好きの対話その一』のなかで「フェアブル」の役割は曖昧である。神話と迷信は、自然哲学と切り離されることもあるが、自然哲学の重要な道具でもある。「フェアブル」は自然哲学にとって「助け舟」のような存在であり、自然哲学的領域で証明できない事柄を「フェアブル」の形をとって説明する。つまり、文学的側面が「科学的」側面を補っている。また、「フェアブル」は哲学的論拠に用いられ、真実の一つの在り方と見なされる時もある。しかし、ここで真実を語る際、詩人から見た真実と哲学者から見た真実は異なるという問題が生じる。詩人のレベルで考えると、「真実を包み隠す」物語は一つの技法として用いられ、真実を強調することができる。哲学者のレベルで考えると、物語が哲学的概念に具体性を与え、それが哲学的真実に近づくための一歩となっている。このようにティヤールは伝統的な「フェアブル」を用いつつも批判的な距離を保ち得ている点で、ある意味近代的な作家といえるのではないだろうか。

---

も被害がひどかったため17万人の男女が死去し、多くの町や城そして都市が崩壊した」。Justin, *Les Histoires universelles de Trogue Pompee*, op. cit., f. 96 r°.